

受賞のことば

「適応合理的」なヒト、という人間像

南山大学准教授 小林 佳世子

協力行動の進化は、今日のサイエンスにおける重要なテーマの1つである。本書は、最後通牒ゲームというよく知られたゲームを題材とし、多数の関連実験などをサーベイしながら、見知らぬ人にも親切にしてしまうヒトの心の究極要因について議論した。その中で、いわゆる「超合理性」と「限定合理性」をつなぐ概念としての、「適応合理性」という概念を提唱した。

最後通牒ゲームは非常にシンプルな構造をもつが、いわゆる合理的経済人を想定した伝統的経済学の理論的予測と、実験における現実のヒトの振る舞いとが大きく乖離する、典型的なアノマリーの1つとして知られている。最後通牒ゲームの戦略的要素をなくした独裁者ゲームの形にしても、多くの人は、見知らぬ他者に貴重な資源を分け与えるという、利他的にもみえる振る舞いを選ぶ。「利他性」の指標としても用いられることも多いこの事実を、本書では、他者の「目」、いいかえれば評判を気にかけるという至近要因が影響していることを示し、さらにその究極要因に迫った。そこでは、一見『理』に『合わない』ようにもみえたヒトの振る舞いは、進化の中の適応という視点でみたときに、ある種の合理性を持つことを議論した。

さらにその議論の中で、経済的合理人の持ついわゆる「超合理性」と、本書で提唱した「適応合理性」の概念は、必ずしも矛盾するものではないことを指摘し、しばしば対立するものとして扱われてきた「超合理性」と「限定合理性」をつなぐものとしての適応合理性という概念を提示した。

本書のテーマは、文理を超えた多くの研究者からの注目を集める、非常にホットな分野でもある。一般の方も含め、どのようなバックグラウンドの方でも読むことができること、しかし同時に専門家の方にとっても得るところのある書物であること、この2点を強く意識した。本書が、さまざまな分野の壁を越えた議論をさらに深めるきっかけとなり、さらに学部生や高校生などの若い読者が学問の楽しさや奥深さを感じる一助となることができたら、著者として望外の喜びである。またこのような栄誉ある賞を頂くこととなり、これまで支えていただいたすべての方に、心からの感謝をささげたい。

こばやし かよこ

1993年東京女子大卒、2001年東京大大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学。02年南山大経済学部講師、08年より同准教授。70年生まれ。

